

グリーンインフラが都市のレジリエンスを強化する ～アフターコロナへ向けての提言～



NPO 法人 Green Connection TOKYO 代表理事 佐藤 留美

1. はじめに

本稿の依頼を受けたのは、新型コロナウイルス感染症が、それほど深刻化していない時期であった。それから数か月で、社会の様相は激変してしまった。状況は日々変化し、先行きは不透明である。ここでは、現時点（4月下旬）において、アフターコロナへ向けてグリーンインフラがどんな意味を持ち、私たちが何をすべきなのかについて、私見を述べたいと思う。グリーンインフラは都市の免疫力を高め、パンデミックにも負けないレジリエントな都市づくりの基盤となるだろう。

2. 「みどり」を希求する人々

新型コロナウイルスの感染拡大が止まらず、世界各地で自粛生活が続いている。そんな状況

の中、公園などオープンスペースの利用が著しく増加している。ある郊外の公園では、緊急事態宣言が出されてからも、例年を上回る数の来園者が訪れている。外出がままならない中、親子連れはもちろん、テレワークや休校中のサラリーマンや学生など、あらゆる人々が、公園に息抜きや運動に来ているのである。感染症予防の自粛生活が、公園の必要性を浮かび上がらせる結果となっている。


世界各地の公園でも同様の事態が起きている。サンフランシスコ市公園局のジンスバーグ部長は、「この感染拡大の解決方策の一つとして、公園は、絶対に不可欠な役割を持つ」と断言している¹⁾。感染症の世界的な大流行という危機において、公園や緑地などのオープンスペースが、都市生活に必須なインフラとして再認識されているのである。このことは、アフターコロナの暮らしを考える上でも、重要な示唆を与



国分寺崖線沿いに広がるみどりの空間。何ものにも代えがたい都市の財産

えてくれる。

3. コロナ災禍から見えてきた 都市の限界



この度のコロナ災禍は、世界有数の大都市、東京で暮らす私に大きな気づきを与えてくれた。

第一の気づきは、都市に人口が集中した結果、「三密（密閉、密集、密接）」から逃れられない生活環境になっていたという現実である。感染症という障壁は、都市集積のメリットの裏にあるリスクをことごとく露呈させてしまった。第二の気づきは、都市農地、すなわち食料生産地が身近にあることが安全性の担保になっていることである。感染症が長期化し、輸入や国内物流がダメージを受けたとき、都市住民は食糧難に陥る。都市農地は食料自給の拠点として機能することだろう。第三の気づきは、身近な自然の存在が、心身の健康維持になくはならないものだということである。外界から閉ざされた空間での生活は肉体的な健康だけではなく、精神をもむしばんでいく。身近な自然がもたらしてくれる木漏れ日やそよ風、鳥のさえずりなど五感で感じられる事象は、自然界に存在する「ゆらぎ」であり、自粛下のストレスを緩和し、私たちの生体リズムを整えてくれる。

現在の隙間なく人工物が密集する都市環境は、自然の持つ自浄作用が働かず、感染症や異常気象災害などを増幅するばかりである。世界中の都市で、自粛下にある多くの人々が、感染に無防備な都市環境に気づき、身近な自然、みどりの価値を再認識しているのではないだろうか。

4. 都市の最重要インフラとしての 「みどり」



この災禍により、私たちの社会は、かつてないほどの経済的、社会的打撃を受けている。ひと段落すれば世界は復興に向けて、活発に行動

し始めるだろう。しかし私たちは、世界中で同時期に体験したこの危機を、忘れるわけにはいかない。数十年に一度と言われた大雨や洪水が、今や日常化しているように、新興感染症が今後頻繁に発生する可能性は高いのである。なぜならこれらの災害は、人間による自然破壊が元凶にあり、私たち自身の足元からの生活を見直さない限り、決して終わることがないからである。

そこで私たちは、自信を持って宣言しよう。「グリーンインフラ」とは生命の根幹に関わるものであり、人間生活における最重要インフラだということを。それは、単に物体としてのみどりではなく、生態系を保持し、災害を防ぎ、コミュニティを育て、食料を供給し、文化や教育の発展に貢献する「みどり」である。そのような「みどり」豊かなまちは、都市の高密度化を防ぎ、創造的でイノベティブな生産性を高め、人々の健康的な生活を保証し、経済活動を活発にするものである。

5. アフターコロナを見据えた 都市の再編



ではグリーンインフラをベースにしたレジリエントな都市は、どのようにしたら実現できるのだろうか。まず、都市づくりの理念を提案したい。その理念とは「里山」に象徴される自然と共生する日本文化である。「里山」では、人が自然に積極的に関わることで生きものが豊かになり、暮らしに必要な恵みが得られ、美しい景観が育まれてきた。「里山」の先には神の領域としての「奥山」があり、人がその境界を侵したとき、災いが起きる。日本人は、長い歴史の中で自然との良好な関係を築くための倫理を育み、文化として醸成してきた。

私たちが育んできたこれらの文化は、アフターコロナに向けての都市づくりの指針となりうる。それは日本の気候風土に根ざし、連続した「みどり」の中に都市機能が組み込まれ、想

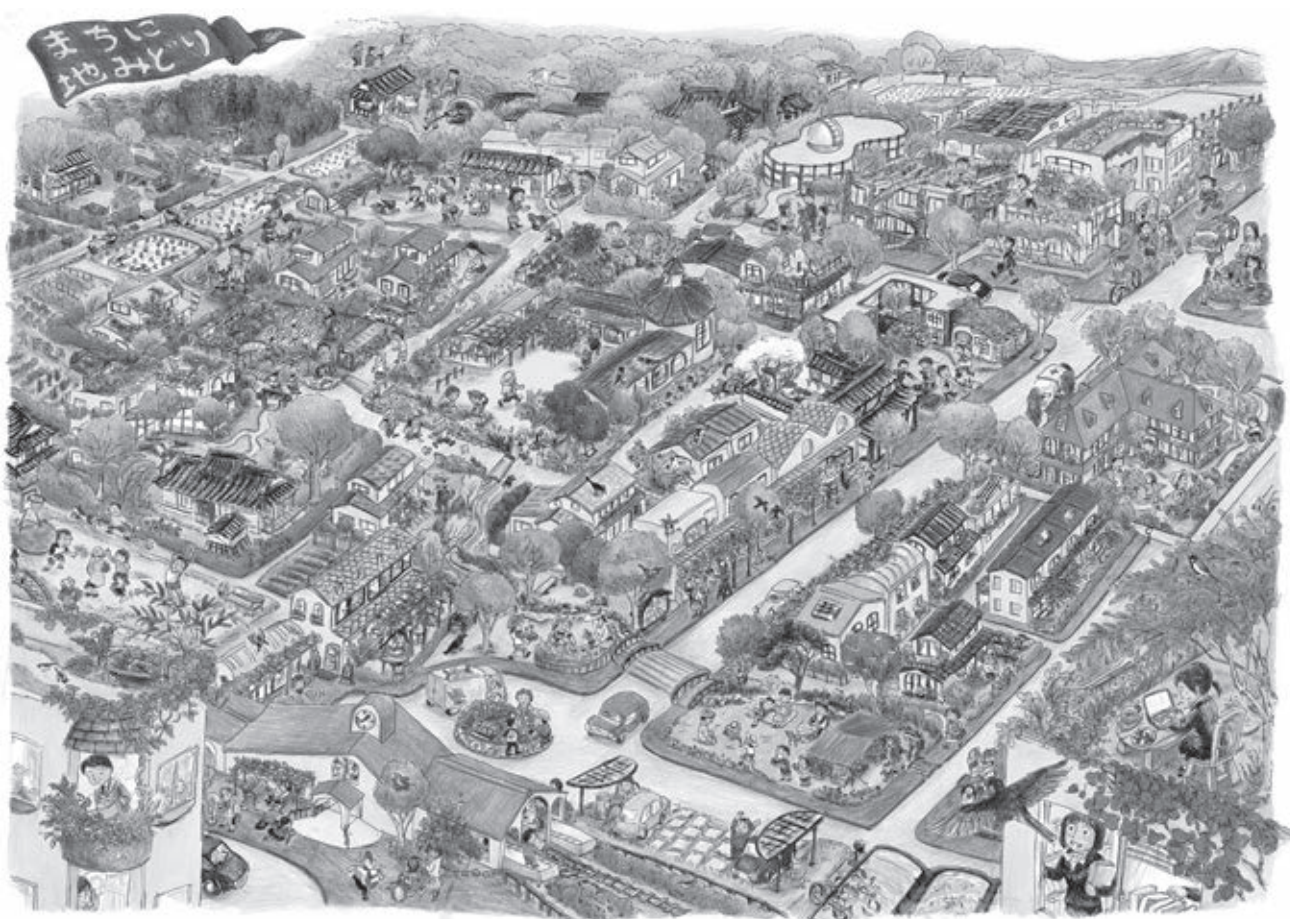
定外の災害をものともしない、強靱でしなやかな都市である。幸いなことに、私たちの生活圏には、今も多くの「みどり」がある。それは公園や街路樹だけではない。田畑や樹林、小川や庭、学校や企業の緑地など、都市に点在するすべての「みどり」は、私たちの暮らしを支え守ってくれる「グリーンインフラ」である。このかけがえのない宝物をより輝かせるために、いまこそ私たちは手を取り合おう。2020年3月に、国土交通省の呼びかけで発足した「グリーンインフラ官民連携プラットフォーム」は、私たちが力を合わせて、この未曾有の危機を乗り越えるためのベースキャンプとなるだろう。日本人

の叡智を結集した里山文化、都市空間に存在するグリーンインフラ。これらを私たちの新しい知恵とネットワークで再編し、みどり豊かな、真の自然共生社会を築いていこう。それは都市のレジリエンスを強力に高め、私たちの人生に確かな手ごたえと成果を与えてくれる都市の姿である。

(さとう るみ)

参考文献

- 1) 「ニューヨーク市、ピッツバーグ市、サンフランシスコ市 COVID19との闘い」, (一社)公園からの健康づくりネット Web サイト, 2020-04-07



一人一人が、みどりを育み、みどりに育まれるまちの姿。グリーンインフラが人々を結び、都市のレジリエンスを高め、豊かで安全な暮らしを約束する (まちに地みどりマップ ©NPO birth)

※「新都市 令和2年5月号」は通信販売にて購入可能ですので、購入ご希望の方は、都市計画協会のWebサイトをご確認の上、お問い合わせください。